

妙法蓮華經一部一卷小字經、御供養のために御布施に小袖二重・鷲目十貫・並びに扇百本。
 文句の一に云はく「如是とは所聞の法体を挙ぐ」と。記の一に云はく「若し超八の如是に非ずんば安んぞ此の經の所聞と為さん」云云。華嚴經の題に云はく「大方広仏華嚴經 如是我聞」云云。「摩訶般若波羅蜜經 如是我聞」云云。大日經の題に云はく「大毘盧遮那神變加持經 如是我聞」云云。一切經の如是は何なる如是ぞやと尋ぬれば、上の題目を指して如是とは申すなり。仏、何れの經にてもとかせ給ひし其の所詮の理をさして、題目とはせさせ給ひしを、阿難・文殊・金剛手等、滅後に結集し給ひし時、題目をうちをいて、如是我聞と申せしなり。一經の内の肝心は題目におさまれり。例せば天竺と申す国あり、九万里七十箇国なり。然れども其の中の人畜・草木・山河・大地、皆月氏と申す二字の内にれきれきたり。譬へば一四天下の内に四洲あり。其の中の一切の万物は月に移りて、すこしもかくるゝ事なし。

經も又是くの如く、其の經の中の法門は其の經の題目の中にあり。阿含經の題目は一經の所詮、無常の理をおさめたり。外道の經の題目の阿含の二字にすぐれたる事百千万倍なり。九十五種の外道、阿含經の題目を聞いてみな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ。般若經の題目を聞いては体空・但中・不但中の法門をさと、華嚴經の題目を聞く人は但中・不但中のさとあり。大日經・方等・般若經の題目を聞く人は或は折空、或は体空、或は但空、或は不但空、或は但中・不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・三千世間の妙覺の功德をばきかず。その詮を説かざれば法華經より外は理即の凡夫なり。彼の經々の仏菩薩はいまだ法華經の名字即に及ばず。何に況んや題目をも唱へざれば觀行即にいたるべしや。故に妙樂大師の記に云はく「若し超八の如是に非ずんば安んぞ此の經の所聞と為さん」云云。彼々の諸經の題目は八教の内なり、網目の如し。此の經の題目は八教の網目に超えて大綱と申す物なり。

今妙法蓮華經と申す人々はその心をしらざれども、法華經の心をつるのみならず、一代の大綱を覚り給へり。例せば一・二・三歳の太子位につき給ひぬれば、国は我が所領なり。摂政・関白已下は我が所従なりとは、しらせ給はねども、なにも此の太子の物なり。譬へば小兒は分別の心なけれども、悲母の乳を口にのみぬれば自然に生長するを、趙高が様に心おごれる臣下ありて、太子をあなづれば身をほろぼす。諸經諸宗の学者

等、法華經の題目ばかりを唱ふる太子をあなづりて、趙高が如くして無間地獄に墮つるなり。又法華經の行者の、心もしらず題目計りを唱ふるが、諸宗の智者におどされて退心をおこすは、こがいと申せし太子が趙高におどされ、ころされしが如し。

南無妙法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず、法華經の心なり、体なり、所詮なり。かゝるいみじき法門なれども、仏滅後二千二百二十余年の間、月氏に付法蔵の二十四人弘通し給はず。漢土の天台・妙楽も流布し給はず。日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給はず。されば和法師が申すは僻事にてこそ有るらめと諸人疑ひて信ぜず。是又第一の道理なり。譬へば昭君^{しょうくん}なんどを、あやしの兵^{つわもの}なんどがおかしたてまつるを、みな人よもさはあらしと思へり。大臣公卿^{くぎょう}なんどの様なる天台・伝教の弘通なからん法華經の肝心南無妙法蓮華經を、和法師程のものがいかで唱ふべしと云云。

汝等是を知るや。鳥^{からす}と申す鳥は無下のげす鳥なれども、鷲^{わし}・鵬^{くまたか}の知らざる年中の吉凶を知れり。蛇と申す虫は竜象に及ばずとも、七日の間の洪水^{こうずい}を知るぞかし。設ひ竜樹・天台の知り給はざる法門なりとも、經文顯然ならばなにをか疑はせ給ふべき。日蓮をいやしみて南無妙法蓮華經と唱へさせ給はぬは、小児が乳をうたがふてなめず、病人が医師^{くすし}を疑ひて薬を服せざるが如し。竜樹・天親等は是を知り給へども、時なく機なければ弘通し給はざるか。余人は又しらずして宣伝せざるか。仏法は時により機によりて弘まる事なれば、云ふにかひなき日蓮が時にこそあたりて候らめ。

所詮妙法蓮華經の五字をば当時の人々は名と計り思へり。さにては候はず、体なり。体とは心にて候。章安云はく「蓋し序王とは經の玄意を叙し、玄意は文の心を述べ」云云。此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈せられて候。されば題目をはなれて法華經の心を尋ぬる者は、猿をはなれて肝をたづねしはかなき龜なり。山林をすて、葉^{このみ}を大海の辺^{ほとり}にもとめし猿猴^{えんこう}なり。はかなしはかなし。

建治三年霜月二十八日

日蓮花押

曾谷次郎入道殿